

ヘレン・ミアーズ (Helen Mears) 著、*Year of the Wild Boar*
— 近代日本への視座をめぐって —

小野澤 隆

こども健康学科

Year of the Wild Boar by Helen Mears
— with Views toward Modern Japan —

Takashi ONOZAWA

要 旨

ヘレン・ミアーズ(Helen Mears: 1898-1989) は米国生まれのフリーのジャーナリスト兼エッセイストで、戦前に二度、戦後はGHQの委嘱で労働基本法制定のために来日した。

ミアーズは、1942年に *Year of the Wild Boar* を出版している。1935年に来日した時の見聞録である。一般的な日本人の日常や思考については、欧米人にとっては未知であったため同書は、日本を知る有用な書として受け入れられた。また同書については、ミアーズの評伝である御厨貴・小塩和人著『忘れられた日米関係—ヘレン・ミアーズの問い』の第二章「戦前の日本を旅する」、第三章「敵国日本の虚像と実像」の中でも部分的に触れられている。

本稿の目的は、*Year of the Wild Boar* でのミアーズの主張及び対日政策を批判した *Mirror for Americans: JAPAN* を執筆するに至った経緯を探ることである。近代日本とは何か、さらにはその国づくりに果たした英学の影響について多角的視点から捉える一助としたい。

キーワード：ヘレン・ミアーズ、*Year of the Wild Boar*、近代日本、英学

Abstract

Helen Mears (1898-1989) was born in the United States. She was a journalist as well as an essayist. She went to Japan twice, once before Pacific War and again after the war at the request of GHQ.

Mears published *Year of the Wild Boar* in 1942. It was of her memoirs during her stay in Japan in 1935. This book became popular among the Westerners who didn't know much about Japan and its people. In this book Mears tried to discuss the "real Japan" which was misled by Westerners under the name of Modern Japan.

Keywords : Helen Mears, *Year of the Wild Boar*, Modern Japan, English Studies in Japan

1. はじめに

ヘレン・ミアーズを語る上で、まず述べておかなければならないことは、ミアーズが1948年に出版した *Mirror for Americans: JAPAN* である。¹ 同書は戦前・戦後の米国の対日政策を批判し、第二次大戦において日米は同罪であると論じている。米国にとって米国流民主化政策を正当化する上で、彼女の論調は都合がよろしくないことであった。邦語訳は占領終了後まではGHQから許可されず、1953年になって『アメリカの反省』と題して出版されたが、あまり注目されることもなく、ミアーズ自身も米国社会から取り残されていった。² 1997年には伊藤延司著『アメリカの鏡・日本』（抄訳版）として再登場し一定の反響を得たが、その後、同書を契機として日米関係に纏わる問題が継続的に深化していった様相はない。従って、*Mirror for Americans: JAPAN* に先立って執筆された *Year of the Wild Boar* の存在について、今日ほとんど知られていない。³ ミアーズにおいても然りである。⁴

しかしながら、*Year of the Wild Boar* の内容を精査していくと、1930年代に日米関係の緊張が高まっていたときの日本の現状、アメリカの対中国政策、日本の明治以降の近代化、さらに戦後 *Mirror for Americans: JAPAN* の出版に踏み切った理由を理解することができる。*Year of the Wild Boar* は、葬られてきた日本と欧米の姿を世に問う貴重な資料である。

2. ミアーズ (Helen Mears : 1898–1989) の略歴

まず、戦後忘れ去られてしまった *Year of the Wild Boar* の著者ミアーズについて必要最低限の略歴に触れておく。⁵

- 米国生まれのジャーナリスト・エッセイスト。
- Goucher College 卒業後北京に1年間滞在。北京滞在中に初来日（1925年）。
- 二度目の来日で東京に8ヶ月滞在（1935年）。
- 帰国後、*The Year of the Wild Boar – An American Woman in Japan* を出版（1942年）。同書はアメリカ人にとって当時の日本事情を知るうえで稀有な書であった。
- 戦後、労働諮問委員として来日して4ヶ月滞在（1946年）。マッカーサーの占領政策を批判。
- 帰国後、*Mirror for Americans: Japan* を出版（1948年）。

3. *Year of the Wild Boar* について

では、*Year of the Wild Boar* (Published in 1942 by J.B. Lippincott Company, Philadelphia) の内容に

触れる。ただ、本調査で利用した文献は、著作権が渡った Greenwood Press, a division of Williamhouse-Regency Inc. から再販されたものであるが、内容は原書と同じである。

さて、*Year of the Wild Boar* の内容を一言で言うならば、ミアーズが1935年来日した時の日本の見聞録である。*Wild Boar* という名称は、1935年が猪年であったからである。ミアーズは、なぜ日本が中国、満州をめぐって、欧米諸国と緊張関係が生まれているのか、国際紛争の根本的な起因は何か、日本国内の情勢はどのようなになっているのか、日本人はどのような日常生活を送っているのか等を観察するとともに、目に映る事象の背後にある深層を探ることをテーマとしていた。

まず、各章の内容に入る前に、ミアーズが関わった中で、主要な登場人物を挙げておく。

Dee :

日本に滞在していた。ミアーズの英国人の友人で、日本企業で翻訳の仕事をしていた。Deeは、自分が置かれている立場を配慮して、自身の考えや感情は、ほとんど表さなかった。

Chiyo :

Deeの友人であり、英国で教育を受けた。帰国してから日本と英国の文化的狭間で生きることに苦悩していた。

Akiko :

Deeの住込みの家政婦で、Mearsの世話をしていた。伝統的な日本女性である一方で、人間関係、環境、時代に対して融通無碍なところがあった。

Nobu :

Deeの友人で、大学教員。欧米文化に詳しい知識人であった。日本と欧米がお互いを理解し合うには、文化的な溝があまりにも深いと感じていた。愛国心の強い一面があった。

Sato :

Deeの友人で、ジャーナリスト。極めて冷静かつ客観的に日本と欧米の立場を鳥瞰していた人物である。ミアーズの良き理解者でもあった。

Mr. Koki Kiyooka:

Deeの友人でChiyoの兄弟である。高等教育を受けた作家で、日本と欧米諸国の対外政策での不協和音に戦争への危惧の念を抱いていた。

Mr. Nikko:

Deeのロンドン時代の友人で、陶器の輸出業に携わっていた。英国を中心にヨーロッパ諸国とビジネス関係を築

いていた。従って、欧米諸国との対立はビジネスの立場から回避されることを切望していた。

Mr. Muro:

Dee の友人で、東京高等師範の英語教員 (a teacher of English in a Tokyo higher school) であった。Dee が当時の日本で冷静な言動を保てたのは Muro の助言・箴言の影響が大きかったと想像される。

Mrs. General Minamoto:

Dee の友人で、軍人であった。軍部の中でも反戦の立場をとっていた。

ミアーズは、主に以上のような人物と接点を持っていたが、日本語があまり出来なかったので、通訳をしていた Dee と Chiyo に頼っていた。また接していた日本人とはいえ、英語がある程度でき、欧米社会についての知識を持つ人物や、日本社会の中で、特権的な一部の上層階級に属する人たちにある程度限定されていた。従って一般庶民と直接に接触することはほとんどなかったと考えられ、ある種の限界はあったと思われる。また登場人物が果たして本名なのか定かではないが、*Mitsui* や *Mitsubishi* 等の固有名詞が使われて、かつ具体的に記述されているので、実在していた人物であることは間違いないであろう。おそらく当時の各界の人名録を丹念にたどれば、誰のことであるか特定できると思われる。

では、目次・内容について概略を紹介するとともに、その裏付けとなる英文箇所を一部抜粋して各章ごとに引用する。

Foreword

ミアーズは、ほとんどのアメリカ人は日本について何も知らない、関心がないと、対日観について指摘している。欧米の影響で日本が古い文明から新しい文明に変わった、啓蒙されたという印象を抱いている程度である。しかし、1930年代、日本では内政並びに対外政策において重大な局面を迎えていた。国際的な問題が起こっている中、欧米諸国は日本についてもっと理解する必要があると、特に中国をめぐる米国と緊張関係が生じていることを認識すべきであると主張している。

... There had seemed to be no reason for us to interest ourselves in Japanese. We assumed that their ancient civilization was being rapidly replaced by a civilization similar to our own. ...

... My intention was to set down as accurately as possible what I saw and heard while living in Japan, hoping to have a record of how the Japanese actually live their day-by-day round; since, however, there is almost nothing that the Japanese do today that

does not have some political implication, a setting-down of their daily activities inevitably leads to politics and international relations. ...

... The possibility of World War II was clearly foreseen in Japan in 1935. Innumerable small events — both inside Japan, and in Europe and Asia — suggested the pressure of forces in motion more powerful than the leaders who must control or guide them. Such straws in wind were visible in Japan, for throughout her modern period Japan has been in the center of the strains and stresses of power politics. ...

... In such a world it is not enough to hate aggressors; it is necessary also to understand them. The peace that must follow this war will have to take into account the forces behind Japan's aggressive drives, or it will only lead to new and more frightful Pearl Harbors. ...⁶

Prologue

ミアーズは横浜港に到着したときの印象について、これまで日本に抱いていたイメージとは全く違っていたと述べている。日本は明治維新以降、欧米の文化文明を急速に享受した大国であると言われていたが、依然として伝統文化を強く保持している神話の国であると分析している。日本は日露戦争での勝利によって、不平等条約の改正を成し遂げ、晴れて大国の仲間入りをしたアジア唯一の欧米型近代化国家であったと言われていたことから、ミアーズは横浜港にアメリカのニューヨーク港の姿を重ね合わせていたが、全く違っていたわけである。ニューヨークのように高層建築や巨大な橋があるわけではなく、また人間の力を誇示する「自由の女神」のような像も存在せず、躍動感あふれるアメリカに対して日本は極めて静的であったと、今まで抱いていた印象と現実の違いに衝撃を受けていた。

... I saw no sign of life — nothing except a few motionless small vessels riding at anchor to suggest that we had reached land at last; nothing at all to remind me that this was port-of-entry to a great commercial city and capital of a Great Power. Instead, what came insistently to my mind was the description, from Japanese mythology, of the creation of Japan. ...

... The port of New York gives entry into a man-made world, with the promise of freedom for the individual as its greatest value. ... It seems to tell the visitor that America is a nation created by men for the use of man. And what did this port of Yokohama tell the visitor? “Japan is the land of the gods.” ...⁷

Introduction to Tokyo

居を構えた東京の第一印象について述べた箇所である。ミアーズは、東京の一部は確かに工業化しているが、日本は欧米人が想像するほど欧米化していないことを知ることとなった。ここでミアーズの視点において重要なことは、欧米と日本の文化文明を比較対照するとき、欧米の基準や物差しを持ち込んでいないことである。日本は欧米とは異なった社会であり、特定の文化文明を普遍的基準とすることを否定している。

ミアーズの文言の中から“different”という言葉が多く出てくることから明らかである。日本は欧米と比べて文明が勝っているとか劣っているかということではなく、お互いに“different”であることを強調している。例えば、欧米では寝るときはベッドで、日本では布団を敷いて寝るように“shukan”の違いでしかなく、そこには優劣はないとしている。

さらにミアーズは“modern”という言葉に注目しているが、ミアーズは“modern”を第一義的な“recent”の意味合いで用いている。ミアーズは日本人が“modern”という言葉を使う場合、明治以降の欧化政策の影響を受けてきたためか“modern”に“Western”或いは“advanced”の意味合いを無意識のうちに過剰に重ね合わせてしまっていると指摘した。“modern”には確かに進歩的という意味があるが、第一義的には、本来は現代へと続いた前の時代と捉えるのが自然である。“modern”という言葉を使用する背後には日本人の劣等感があり、自ら自尊心を貶めているとミアーズは感じていた。しかし、今日においても、その柵は残存していると言えるのではないか。

... I had visited Japan briefly ten years earlier and had made this same trip from Yokohama to Tokyo. I had remembered the scene as predominantly rural. Now, however, there was a solid huddle of minute ramshackle one- and two-story frame buildings with roofs of corrugated iron or tin, and in the background as occasional factory chimney belching smoke. ...

... The Japanese and Western rooms seemed to thumb noses at each other, each making the other look ridiculous. ... What I felt here was the meeting of two civilizations that seemed mutually antagonistic. ... I should have to forget their Western clothes and English sentences and look for the answers in terms of the Japanese facts that motivated their behavior. ...

... *Shukan* means “custom” “the customary thing.” It lies at the bottom of everything that goes on in Japan. No matter what else a Japanese appears to be doing, he is first of all obeying the rules, following the accustomed pattern of behavior. ...

First Days

Introduction to Tokyo の続きで、ミアーズが東京での生活体験に新鮮な驚きを覚えたことが述べられている。

まず、日本人の生活は simple であるということである。人が暮らす上で必要最小限のものを享受することで満足し、たとえ特権的な富裕層であっても決して欧米社会のようにとつもなく豪華な生活を日本人がしているわけではない。また、狭い空間で多くの人がひしめき合い、プライバシーもないような状態で暮らしているのに、整然としていて、お互いに迷惑をかけないよう、助け合いながら生きていることに驚きを覚えている。ミアーズは、アメリカ人は気性として、現状に満足することなく常に変化 change を善として better を求め、自己の権利を優先する傾向が強いが、日本人は現状を受け入れ、社会の安寧を優先しながら生活を送っていると分析している。こうした日本人の生き方はミアーズの文化文明観に多大な影響を与えたと思われる。

... Our neighbors, it seemed, had no use for such foreign luxuries and were content with the national staple diet — bean soup, cereal, fish and pickle, with soybean sauce of seasoning, and bean jelly candy for a treat. ...

... Of privacy, there was obviously none at all. Never, I thought, had humanity lived and worked together so many in such little space. Was this, I wondered, the “real Japan”? Would Nobu accept this as the “Japanese Way”? And if so, just what did it add up to, just what did this swarming community mean in terms of human beings living together? There was primitivism, there was the mud that had ruined my white canvas shoes, and there was the fetid stream that coiled about among the little houses and that I saw used as a toilet. This was squalor. And yet, curiously enough, the houses themselves did not seem squalid. Because of their emptiness, and because of the clean-looking straw mats, they had an air of order, and even spaciousness. There was about the place, too, a sense of communal sharing of occupations, and, of course, a complete lack of physical solitude. That matron, standing in the alley, washing her kimono, with her children in bright red and pink kimonos rolling on a scrap of matting at her feet, was in the center of the life of her neighborhood. And if the matron next door, kneeling at the edge of her living room, sewing, seemed to me a character on a stage, from her own point of view her position was reversed, and she held a free seat in a box from

which to keep an eye on the show. ...

... , however, one great difference — there was here no boisterousness, no noise, no sense of lusty interplay between individuals, no quarreling. These people were, on the whole, as silent as ants, moving about their affairs with no appearance of either pleasure or distaste. So many people so close together, and so little evidence of friction! Was this really true, I wondered. And, if so, how was it possible? ...⁸

Modan Japan

タイトルの *Modan Japan* の *Modan* は、スペリングのミスではなく、ミアーズが敢えて使った言葉である。Introduction to Tokyo の中で、日本人が “modern” という言葉を Western 或いは advanced の意味で使っていることへのミアーズの複雑な想いであろう。日本は欧米化を目指し、制度や文物を受容したが、依然として日本社会にとって欧米の文物は異質であると映っていた。なぜ、古来より長い間育んできた良き日本の文化文明を否定し、捨て去ろうとしているのか、ミアーズは一人の人間としてやりきれない思いであった。日本人は何かも欧米のものは優れていると錯覚しているようであるが、それは間違いで、ましてやコンプレックスなど持つのはナンセンスであり、決して日本は backward ではなく生活スタイルの違いに過ぎないと主張している。

また、ペリー後、欧米文化が日本に怒涛のように押し寄せてきたために、伝統的な日本の文物と欧米の文物が調和せず混在し、それが原因で日本社会に混乱や不安が増大したと考えた。しかし、こうした問題は不平等条約の改正に至るためには日本は欧米諸国に相当する文化文明を備えていることを証明することを余儀なくされ、欧米を師と仰ぎ、欧米を模範とすることを条件として求められていたためである。ミアーズは、こうした日本の現状に気づく中で、アジアでの欧米諸国の理不尽な植民地主義・帝国主義に対して批判的になり、同時に日本と欧米諸国の対立の萌芽を予感していた。

... Choosing at random, we dropped into a small café with a sign at the door reading “Modan Bar — Café Cherrio.” It was a small room with a bar at one end, a few large leather armchairs grouped around minute tables, and a number of booths along one wall. We were the only guests, and were welcomed as we entered by a group of five or six little Japanese maids, some in Western evening dress — slinky stain or crisp taffeta — and some in kimono. Those in kimono bowed low, and those in evening dress said, “Hello.” ...

... The coming of Perry resulted in the “Opening

of the Door” of Japan; Western science, machines, ideas, institutions and customs came pouring in, with the result that there developed in Japan a new civilization entirely different from the one that had existed Before Perry. I had known this, of course. What bothered me was that, actually, there seemed to be very little genuine Westernization. I had supposed, from the numerous accounts I had read of modern life in Tokyo, that it was a city very much like any other capital. Now I was here, however, it seemed to me that most of life was quite removed from Westernization, and that the Westernized things were not genuinely assimilated, but stuck up like a sore thumb, to announce that they were foreign. ...

... I said this aloud, commenting that Tokyo was much less modernized than I had expected, and adding that even in the heart of the city, I had seen little that suggested the Great-Power Japan that I had heard so much about. ...⁹

Japan - Modan and Immemorial

伝統的な日本と欧米化する日本、並びに欧米事情について詳しい様々な分野・業種の日本人と意見交換を積極的に行っていた。ただし、すでに述べたように、ミアーズが接してきたのは一般庶民ではなく、欧米の文化文明について知識を持っている人、あるいは英語を解する人であったため、平均的な日本人の考えや日常生活にどこまで触れ、咀嚼できたかは疑問が残る。日本にいる外国人の多くは、外国に関心がある日本人、または何かしら外国と関係している日本人との接点に限定されている。

さらにミアーズが日本人と接する場合は、Dee と Chiyo が仲介し通訳をしていた。従って、ミアーズが日本人に自ら直接接触して得たものではなく、第3者を介しての見聞であることも若干斟酌しておくことも重要であろう。なぜなら、当時の日本の事情に詳しい Dee や Chiyo が余計な軋轢や争いを引き起こさないように、特に政治的な問題に対して慎重に通訳し、場合によっては手を加えて穏やかにミアーズに伝えた可能性もあるからである。

... “No foreigner can understand Japanese culture,” he said, more bored apparently than arrogant. “The foreigner,” he went on, “is interested in facts, whereas we know that facts are of no importance. What is important, is intuition.” ...

... Mr. Nikko made it clear that no Japanese would find anything odd in the idea of spending four hours viewing invisible fireworks. ...

... This Kamatari Fujiwara, Mr. Muro went on, was the connecting link between the Age of Gods

and modern Japan. ... He was also an ancestor of the illustrious Mitsui family who were so prominent today in financial and industrial and government circle of modern Japan. ...

... Mrs. Minamoto's, for instance, contained great leather chairs, their backs covered with antimacassars of Irish crochet, mission chairs, wicker tables and an enormous Chinese inlaid with mother-of-pearl. ... Such incongruities, however, are more obvious in Japan because of the perfect sheen and order of the purely Japanese room. ...¹⁰

Hokkaido Holiday

日本滞在中、夏の蒸し暑い東京を抜けだし、北海道旅行をしたときの体験談である。東京を中心に生活してきたミアーズにとっては、東京以外の日本の様子を見聞する貴重な機会でもあった。名所・旧跡の観光を楽しむというよりは、旅行をとおしてその土地で遭遇する日本人の行動を観察していた。東京在中においても感じていたことであるが、例えば込みあった列車の中で他人の迷惑にならないようにする日本人の振り舞いや秩序を重んじる姿勢に改めて敬意を表していた。ミアーズは、欧米人であったならば車内で快適さを要求する主張をしたり不満を述べたりする人が必ずいたに違いないと述べていた。

また、この旅行とは直接的に関係のあることではないが、欧米と日本の文化の狭間に生きる Chiyo について語っていた。Chiyo はイギリスで教育を受け、自分の権利を主張することを自然に身に付けていたので、日本社会では適応できず、受け入れてもらえないことに同情と悲哀を感じていた。Chiyo は自ずと日本に対して批判的になり、欧米の文化文明は日本より優れているという感情を抱いていた。Chiyo は、欧米的な部分を背負いながら、日本社会の枠の中で生きなければならないことにストレスを感じていたわけであるが、それはまさに当時、日本が置かれていた状況に酷似している。日本も、日本の文化文明を持ちながらも欧米の文化文明が主導する秩序の中に組み込まれようとしていたのである。Chiyo と日本の立場は反対であるが、Chiyo の姿は日本を映しだす鏡であった。

... in England, she was a Japanese, a member of a "colored race," who was tolerated up to a certain point, but who was never granted full equality. It was the constant prick of this basic humiliation of race that had turned Chiyo into an embittered, frustrated woman, whose warped personality made it impossible for her ever to work out a satisfactory life in either country. ... She might, too, have made a better adjustment in Japan had she not constantly seen everything Japanese through the distorted point of

view of English people who felt superior to Japan. ...¹¹

Land of the Gods

前章までは、日本と欧米の文化文明の違いについて語っていたが、この章からは日本人の精神性と宗教性について洞察を行っている。日本には神話が生き続け、その頂点に天皇が存在し、日本人の生活様式、行動様式、習慣はこの天皇を中心に据えた精神性と宗教性に基づいているとミアーズは指摘した。

... Of all the great nations, America alone had never had a mythological beginning. We were children of the industrial revolution — we had conquered a vast continent swiftly with the help of machines. We had never worshiped nature, we had conquered her. Our notions about life were practical. ... There was not time or place for the nonsense of mythology. ... How then could an American understand Japan — a Great Power with aggressive mechanized armies overrunning a neighboring country, competing in the markets of the world with the industrialized Western nations, but also a nation still living in the age of nature gods, with a nature god for its Head of State; a nation that taught this mythology in school and called it history. ...

... America was wholly the product of the machine-age. Japan, however, was like a shaft thrust back through the ages to the beginning by some cosmic archeologist, in which each succeeding period was clearly exposed, with the different strata dovetailed and interlapping, and colored everywhere by the mythological past that veined the whole like the flowing streams in a slab of marble. Mythological Japan was sensible as a civilization that had persisted, as though preserved under glass, from the earliest stage of human society, when man — not having science to help him — relied on the gods. ...

... In Before-Perry Japan much of the formal ritualistic culture was the special province of privileged classes, and in modern Japan it is neglected as the ancient classes disappear and the wealthy turn toward Westernization. The government was attempting to preserve this culture by putting it into the universities and school. ...

... Agricultural Japan did not suggest a Great Power. Nor, when I came to examine it, did industrial Japan. ...

... Industrial Japan seemed almost as primitive as agriculture. Only in the heavy industries and textiles were there any plants that could compare at all

with those in the Western nations. And such large, rationalized factories represented a small part of industrial Japan. When I began deliberately to look for Japanese industry, I thought I had not yet seen any of it; actually it had been all around me, for more than sixty percent of the export products were made in the small home workshops like those in our neighborhood, where husband, wife, children, and perhaps an apprentice or two, worked incessantly turning out some small gadget. Their material was supplied by a middle-man working for some one of the great corporations; and their products were turned over to the same sources. Their earnings barely covered their rent and taxes and their minimum in food and clothes. ...

... Industrial Japan was wholly dependent for markets and materials on foreign nations. The Japanese people did not use the things their simple machines produced. Nor did Japan produce the raw materials with which they were made. Raw silk was the only important raw material, and to this fact was due Japan's extraordinary rise in her export of textiles. ...

... Yet even the textile industry was vulnerable, for raw cotton must be imported, and the woven silk sold outside Japan. ...

... The national income of America was over twelve times the national income of Japan. And whereas American's income was capable of enormous expansion, Japan's was strictly limited by the facts of little space, few natural resources, and her dependence on foreign markets. Japan was engaged in an aggressive move against a neighbor; her military expenditures were taking almost half the national budget; yet in terms of U.S. dollars, Japan's military expenditures of America, — expenditures, moreover, that represented only fifteen percent of the U.S. budget. ...

... The primitive mythological Japan had seemed startling, because it was apparently an integrated part of a modern Great Power. On closer inspection, however, the Great Power Japan seemed almost as much of a myth as the Sun Goddess. Inside Japan, studying the statistics, reading history, viewing the country, it was impossible not to come to the conclusion that, when the Western powers admitted Japan as a presumed equal into their counsels after the World War, they did so because of certain balance-of-power needs of their own, rather than because of the claims of Japan as a modern nation. ...

... Japan had no army in the Western sense; no

navy at all: no commercial ships. The people were ignorant of science; had no machines; and hardly more than a handful of guns, which the Dutch traders had provided for them. This Japan was overrun by foreigners who took control of commerce and customs; secured long-term leases; their activities protected by extraterritoriality, and backed by their gun-boats. Just sixty-six years later, this nation, in the person of Marquis Saionji, took its place as one of the "Big Five" at the Paris Conference, to settle the terms of the World War. ... In 1853, when Japan's door was opened, the island kingdom seemed well on the way toward a similar colonial status. What prevented this happening? How did Japan manage to free herself to become an aggressive Great Power? ...¹²

The Way of the Gods

天皇を中心とする宗教性と精神性は、日本社会、特に政治の在り方に重要な役割を果たしていると分析した。天皇の存在と役割については、天皇は日本人の精神的支柱であり、また政治のリーダーであると指摘する中で、アメリカの大統領との違いを引き合いに出した。例えばアメリカでは大統領は政治のリーダーではあるが父親のような精神的支柱とは感じていないと述べている。

... I had already learned, wandering through the fishing and farming villages and the small home workshops of Tokyo, that the terms "individual initiative" and "profit motive" were unknown in such places. ... For it was easily verifiable that the general standard of living was, from an American point of view, mere subsistence — and this was true, not only of the farmer and industrial workers, but also for the professional classes. ... The values and satisfactions of these people could not be expressed in terms of money — what then were their satisfactions? ...

... When I inquired how it was that the people were content to work so long for so little, the answer varied depending on whether my informant was a Japanese-Japanese who had never been outside his country, or a "foreignized" Japanese who had lived or traveled abroad. The former inevitably mentioned the "Sun Goddess," the Tenno System, the "Nippon Spirit"; the latter spoke of the "Family System," the "Theory of the State," and the fact that the Japanese is "not a materialist or an individualist." ...

... "Japan's progress," said a Westernized official

in the Home Office, to whom I had a letter of introduction, "is due to our homogeneity. We are united by our Family System and by our Emperor. We Japanese are not materialistic and individualists as you American are. We are all members of a national family. We work together for the national good." ...

... The civilization that developed in Before-Perry Japan was a brilliant solution for an economy of scarcity. It was the adaptation of an unenergetic people to a Spartan, melodramatic environment. It was based on a subsistence standard of living; and it was a controlled society. Because of the special conditions under which it developed — among which the most striking is the recurrent withdrawal into isolation — the Japanese "Way" represents a controlled laboratory experiment in human relations and social problems. ...

... Its life falls into three definite periods: a period of avid abortion of food; a period in which it wraps itself in a cocoon of isolation while the food is assimilated; and a period during which it bursts forth in a brilliant new form. Japanese civilization developed in the same way, by periods of borrowing from foreign cultures, followed by periods of retreat into isolation while the new ideas, institutions and things were digested by the gentry of the Court and the Town, and in this predigested state were allowed to trickle down to the people. ...

... These people, who preferred isolation and frugality to the effort of conquering and colonizing, adapted themselves to their environment. ...¹³

Sword of the Goddess

中国・満州問題を巡って、経済的実利を優先する日本の政財界と日本人としての自尊心とアジアを欧米列強から解放すると主張する軍部との対立が激しさを増していた。軍部の台頭により欧米との武力衝突は避けられないとミアーズは予感していた。

なおこの章のタイトル Sword of the Goddess の Sword は fighting、すなわち戦いを象徴するものであり、日本の軍部は宗教的・精神的支柱である天皇のために戦う組織となっていたとミアーズは捉えていた。

... From the point of view of Japan's prosperity it was much better if Japan could compromise with Chiang Kai-shek and Britain, for Japan was completely dependent for raw materials and markets on the good-will of Britain and the United States. The military, however, did not understand this, and

they did not understand diplomacy. They believed that force was all the Western Powers respected. They insisted therefore on a constant show of force and boasting of power. ...

... Modern Japan has been based on a paradox. When we brought in Western machines, industrial and financial techniques, and Western institutions, we set up within our country an alien civilization. That civilization helped us to develop from a little group of islands into a Great Power in fifty years; simultaneously, it threatens to destroy our ancient civilization on the survival of which the modern nation depends. Our imported Western civilization helped us become a Great Power; it also destroyed our national security.

... If we surrender our military machine, we cease to be a Great Power. And if we cease to be a Great Power, it is not at all improbable that we would shortly cease to be an independent sovereign nation. We have survived and grown because our military exploits have fitted in with the balance-of-power requirements of the Western nations. ...¹⁴

Good bye, Akiko

ミアーズは、日本において社会統制が一層強くなってきたことを肌で感じ始めていた。中国・満州問題を巡って武力衝突の危険が迫り日本社会に不穏な空気が蔓延していたのである。

ミアーズが日本を去るに至った正確な経緯は定かでないが、身の危険を感じて、僅か8ヶ月の滞在で日本を出国したと考えられる。

... There was always the danger of judging Japanese reactions from an American point of view, of assuming that because an American found certain habits of living uncomfortable, the Japanese must also find them uncomfortable; of assuming that because an American found certain customs and restrictions intolerable, they were intolerable also to the Japanese. I had by now learned this lesson — that the Japanese civilization was as satisfactory to the average Japanese as the American was satisfactory to the average American. ...¹⁵

Epilogue

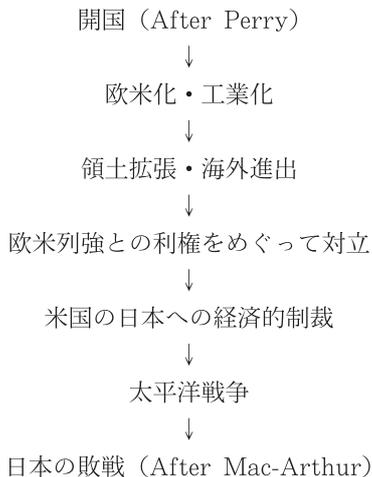
戦争に突入する最終的な理由は、国家間の利益衝突に起因するわけであるが、ミアーズは更に一步踏み込んで、19～20世紀前半にかけて国家間の利益衝突の根本的な要因は何かを、日本と欧米間の衝突の危機の中で洞察していた。

ミアーズは、その源流は近代化 modernization と工業化 industrialization, machine age にあり、その過程において国家間の衝突は避けられないとしている。1935 年に日本に滞在していた時点では、どの国が悪いとか良いとかという問題意識はミアーズは明確に持っていなかったようであったが、*Year of the Wild Boar* を執筆した時点では、若干、日本擁護、欧米批判のニュアンスが現われてきた。しかし、欧米諸国、そして同じ道を歩み始めた日本をとおして人類にとって近代化・文明とは何かをミアーズは突きつけられていた。

... A view of the world from this newest of the Great Powers dramatized the fact that Japan's crisis was part of a world crisis that was part of a revolution in time and space caused by the machine age. ...¹⁶

4. ミアーズの視点

さて、今年(2017年)は終戦から 72 年になるが、改めて太平洋戦争にいたった日米関係の経緯を辿ってみたい。過去を振り返ることは、今日、そして将来に向けて如何に両国が健全な関係を築いていくための試金石であるからである。開戦に至った要因は複雑であり一言では言い尽くせないことは承知しているが、敢えて近代日本から太平洋戦争への過程をミアーズの視点に立って挙げれば、以下のようなものではないか。



ミアーズが *Year of the Wild Boar* で扱った範囲は、太平洋戦争に突入する直前のところまでであるが、その後の経緯についてもおそらくミアーズは予期していたに違いない。

この図の展開はおおよそ日本人の見解に類似しているが、一般のアメリカ人はこのようには捉えていないであろう。アメリカは、アジアにおける日本の植民地主義・帝国主義を阻止することを使命とし、東京裁判においてアメリカ

カの行動は正義として歴史上確定されたと主張するであろう。しかし、正義は力関係に左右される。戦後間もなく、この司法裁判そのものへの疑義が問われたが、勝てば官軍で敗者は何も言うことができず、全ては葬られてしまっている。

戦争は人間の欲望や些細な争いの延長戦にあるもので、恣意的である。そうであるならば、争いに至った経緯には争いの当事者である、日米それぞれの言い分があるはずである。ミアーズはこのことを提示しようとしたのである。小堀桂一郎は太平洋戦争について次のように述べている。

アメリカ人に独自の歴史解釈権があるならば、日本人にも日本独自の歴史解釈権はある。この大原則を以て考えないかぎり、永久に調和点を見出すことはできない。¹⁷

この指摘は今後の日米関係にとって、さらには将来、日本が国際社会でどのような役割を演じることができかねるかを占うと言っても過言ではないであろう。ミアーズも小堀と同様の考えを持っていたと思われる。ミアーズは決して一方的に日本、アメリカを擁護または批判しているのではない。ミアーズは太平洋戦争の発端においてアメリカが善、日本が悪であることがあたかも普遍的に語られていることに大なる疑問を抱き批判しているのである。

ミアーズは、日本滞在の経験から日本はアジアを侵略、更には世界制覇をもくろみ、片やアメリカは日本の野望を粉碎しようと正義のために立ち上がったとは見ていなかった。

ミアーズは *Year of the Wild Boar* で、もう一つ問いを投げかけた。それは近代化・文明とは何かである。この両者はほとんどの場合、肯定的に捉えられてきた。しかし、ミアーズは、近代文明の負の側面としての戦争の蓋然性について論じた。言い換えれば、近代化、それに伴う工業化は武力衝突の道に進まざるを得ないということである。

また、どの国家・民族もそれぞれ固有の伝統・歴史を背負い文化文明を形成してきた。この文化文明の成り立ちや性質はそれぞれ異なるので、各々の文化文明は個々に尊重されるべきものである。己の文化文明が優れているとか、異なった文化文明は許容できない、さらには己の基準に従うべきだという考え方は言語道断である。しかし現実には人間社会ではそのようにはいかない。人は己が正しいと思いがちで、それを相手に強要することがしばしばおこる。

近代化という歴史段階は、工業化を前提としているために拡張主義を継続していかなければ先が無いわけで、留まっていたは行き詰ってしまう。従って相手の領域まで出ていかなければならず、相手に対して干渉が始まり、

米関係から *Mirror for Americans: Japan* とその翻訳書は人の目にとまることはなかった。

その後しばらくして伊藤延司: *Mirror for Americans: Japan* の邦語抄訳『アメリカの鏡・日本』(1997年)が出版された。これがきっかけで、漸く日本人は *Mirror for Americans: Japan* の存在を知ることになった。同書は衝撃的でアメリカの対日政策や日米関係に一石を投じたと思われたのであるが、実際にはその後、特にこの問題が大きく社会で注目されることもなく今日に至っている。つまり、ミアーズ並びにミアーズに関する書籍は日米において、葬られてしまったといっても過言ではない。*Year of the Wild Boar* の存在自体が埋もれてしまった所以である。

⁵ 御厨貴、小塩和人『忘れられた日米関係』ちくま新書、1996年、14-16頁

⁶ Mears, Helen. *Year of the Wild Boar*, Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1973, pp. 7-9.

⁷ Mears, *Years of the Wild Boar*, *op. cit.*, pp. 15-17.

⁸ *ibid.*, pp. 74-98.

⁹ *ibid.*, pp. 86-91.

¹⁰ *ibid.*, pp. 111-120.

¹¹ *ibid.*, p. 179.

¹² *ibid.*, pp. 205-237.

¹³ *ibid.*, pp. 239-247.

¹⁴ *ibid.*, pp. 296-302.

¹⁵ *ibid.*, p. 338.

¹⁶ *ibid.*, pp. 345-346.

¹⁷ 小堀桂一郎「日米関係の原点とは何か」(『別冊 正論』2010年9月)、79頁

¹⁸ 日本英学史学会公式ウェブサイト参照。

文 献

井田好治『日本英学史論選集』Culture Publication、2008年

伊藤延司 訳『アメリカの鏡・日本』角川書店、2005年

川勝平太『日本文明と近代西洋』日本放送協会、1991年

小堀桂一郎「日米関係の原点とは何か」(『別冊 正論』2010年9月)

原百代『アメリカの反省』文芸春秋新社、1953年

Mears, Helen. *Mirror for Americans: Japan*, Boston: Houghton Mifflin Company, 1948.

Mears, Helen. *Year of the Wild Boar*, Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1973.

御厨貴、小塩和人『忘れられた日米関係』ちくま新書、1996年

(2017.9.11 受稿、2017.10.2 受理)